

大学等における軍民両用研究是非についての論

2016年11月15日

(公財) 先端医療振興財団 臨床研究情報センター

京都大学名誉教授 福島 雅典

兵は国の大事にして、死生の地、存亡の道なり、察せざる可からず。今日において科学乃至技術は国の大事にして、死生の地、存亡の道なり、察せざる可からず。

戦争 War も戦闘 Battle も人と人が行うものであり、科学・技術はすべて人と人が行う営 (いとなみ) に由来するのであるから、研究一切が D.U といいてよい。例えば、私たち医師が診断・治療・予防のために行う研究一切は、兵士の健康・医療に関わることになるではないか。さらに兵站をも考えれば日常生活一切合切是軍事。どうして、研究開発を軍事と民生に分けることができようか。

科学に善悪なくとも、ひとたび技術としてその利用を企図すれば、その瞬間に善悪の衣をまとうのである。ひとたび技術として成れば実際に使用され、さらに性能の向上を求められる。それは人間社会における技術の宿命である。莊子曰く、機械あるものは必ず機事あり。機事あるものは必ず機心あり。

そもそも国民の健康・幸福・安寧そして社会の発展、わが国の繁栄、国際貢献、世界平和を考えるに、今回の学術会議の軍民両用に向ける検討のあり様に、深い危惧の念を抱かずにおれない。その動機たるや研究費の確保であり、研究者のエゴむき出しの卑しさにはあきれるばかりである。

パワーポリティクスがますます色濃くなる現在の国際情勢を背景に、今、科学・技術研究者が心せねばならぬことは何か、深く考えるところから始めるべきではないか。アインシュタインの苦悩をみるまでもなく今、研究者の社会的責任と倫理が深刻に問われている。